中学生のいじめ認識

- いじめ経験との関連から-

Junior High School Students' Insights into Bullying

谷　口　明　子*
TANIGUCHI Akiko

要約: 統計的にはいじめ発生件数が減少しているとはいえ、いじめが看過できない教育上の課題であることは変わらない。いじめ深刻化の背景にはいじめの潜在化があると言われるが、その要因のひとつに中学生のいじめ認識のゆがみがあるのではないかと考えられる。そこで、本研究においては、いじめが最も深刻である中学１、２年生を対象として、どのような行為を「いじめ」と認識しているのか、またそうした認識はいじめ経験の有無と関連があるのかどうかを質問紙調査によって検討した。結果として、衝動的暴力や遊び型のいじめ行為に対しては、それが「いじめである」という認識が低く、さらにそうした遊び型いじめに関しては、被害経験のある生徒でさえ「いじめではない」との認識があることが明らかになった。中学校におけるいじめ防止を考える際に、こうしたいじめへの認識のずれに焦点をあてた対応が望まれる。

キーワード: いじめ認識　いじめ経験　遊び型いじめ

I　はじめに

平成19年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」よれば、いじめの認知件数は約10万1千件と前年度より2万4千件減少している（文部科学省，2008）[7]。しかし、スクールカウンセラー等の学校臨床関係者からは、統計的な数値の減少が必ずしも現実のいじめ減少を表していないのではないかとの疑念が呈されている（本間，2003）[2]。いじめを苦にした児童生徒の自殺が後を絶たず、「ネットいじめ」などの新たなタイプのいじめが登場していることからも、いじめが依然として大きな教育上の課題であることは疑う余地がないだろう。こうした現状への対応として、様々ないじめ防止プログラムが学校・学級単位で試みられているが（Sharp & Smith，1994；松尾，2002；池島他，2006）[10] [5] [4]、何よりも、いじめがエスカレートする以前に適切な介入が行われることが肝要であるとされている。しかし、同時に、早期介入の難しさも指摘される（本間，2008）[3]。

いじめへの早期介入を難しくすることの一つにいじめの潜在化があると言われる（森田・清永，1994）[8]。周囲の大人、特に教師の気づかないところでいじめが進行し、取り返しのつかない事態となってはじめて表面化することも珍しくない。なぜ、学校でおこるいじめは表面化しないのだろうか。

要因として、いじめ手口が狡猾になっていることも挙げられるが（森田・清永，1994）[8]、別の側面として、大人の常識からは当然「いじめ」と考えられる行為も、児童生徒たちの世界では「いじめ」であるとは認識されないという判断基準のずれの存在が考えられる。認識されないが故に、教師

*附属教育実践総合センター

をはじめとする大人に報告されることもなく、結果的に発見されずに介入にもつながらないという潜在化のメカニズムがあるのではないだろうか。

本研究においては、「いじめ認識」を「ある行為を『いじめ』と判断するか否かの判定」と操作的に定義し、中学生がどのような学校場面での具体的行為を「いじめ」と認識するのかをあらためて問い直し、併せて、そうした「いじめ認識」がいじめ経験とどのような関連をもつのかを明らかにすることを目的とする。

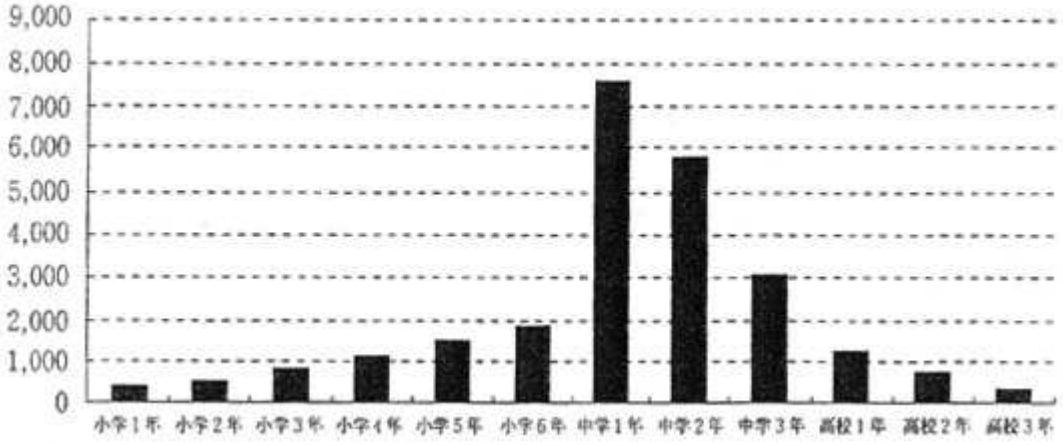

図 1　平成 15 年度「学年別いじめ発生件数」（文部科学省 HP より）

図 1 の平成 15 年度「学年別いじめ発生件数」（文部科学省，2004）[6] に見られるように、中学 1 年生および 2 年生においていじめが特に深刻であることから、本研究においては、中学 1 ・ 2 年生を対象として、以下の 4 点について検討する。

- 1．中学生がどのような具体的行為を「いじめ」であると認識するのか。
- 2．中学生の「いじめ経験」（加害・被害・傍観・経験無）の特徴はどのようなものか。
- 3.「いじめ認識」と「いじめ経験」（加害・被害・傍観・経験無）にはどのような関連があるか。
- 4.「いじめ認識」に学年差・性差はあるか。

II　方法

1　予備調査

どのような学校内の具体的行為が「いじめ」と捉えられているのかに関する情報収集を目的として、Y 県内大学に在籍する大学生 14 名（女性 10 名、男性 4 名）を対象として、2008 年 11 月に自由記述質問紙調査を行った。「あなたが 中学時代に 経験した「いじめ」のエピソードを、できるだけ具体的にたくさんあげて下さい。『経験』の中には、見たり聞いたりしただけのものも含まれます。」との質問に対して自由に回答してもらい、いじめに関する経験のエピソードを収集した。

結果として 35 のエピソードが収集され、文部科学省が「いじめの態様」として挙げている「言葉での脅し、冷やかし・からかい、持ち物隠し、仲間はずれ、集団による無視、暴力を振るう、たかり、

お節介・親切の押しつけ」を参考にしつつ、表１にみられる１５の行為を「いじめ行為」として抽出した。

2　本調査

Ｙ県内公立中学校２校に在籍する中学生（1 年生 64 名、2 年生 235 名、女子 150 名　男子 149 名）を対象に質問紙調査を 2008 年 12 月に行った。調査は、まず学校長宛てに依頼文書を出し、ご協力いただける部数の質問紙を郵送の上、施行・回収は各学校にまかせ、郵送にて回収するという手続きで行われた。調査内容は、下記の通りである。

- 1. フェイスシート：学年・性別
- 2.「いじめ認識」: 15 項目の「いじめ行為」に対して、「あなたは次の行為を見たとき、それをいじめだと思いますか。」との質問のもと、「いじめだと思う・いじめではない」の２つの選択肢から、自分の気持ちにあてはまるもの一つを選んでもらった。
- 3.「いじめ」経験：15 項目の「いじめ行為」それぞれについて、加害経験・被害経験・傍観者経験の有無を確認するために、「あなたが中学校に入ってから、以下のことについて、したり、されたり、見たりした経験がありますか。」との質問のもと、「した・された・見てただけ・経験なし」のチェック欄に印をつけてもらった。回答にあたっては、したこともあるしされたこともある人は両方にチェックしてもよいことを記載した。

分析は PASW（旧 spss）Ver.17.0 を用いて処理を行った。

III　結果と考察

1　「いじめ認識」について

項目としてとりあげた 15 の行為は予備調査において「いじめ」経験として呈示されたものであり、基本的にはすべてが「いじめである」と判断されてしかるべき行為である。にもかかわらず、「３．相手がムカついたのでたたく」「14．遊びと言ってちょっかいをだす、たたく (例．プロレスごっこなど)」の２項目については、「いじめではない」の選択率が有意に高いという結果となった。執拗さが希薄な衝動的暴力、または相手にも非があるという正当化が可能な暴力については「いじめ」とみなされないこと、さらに「プロレスごっこ」といった遊びっぽさが含まれる行為も中学生からは「いじめ」とみなされにくいことが明らかになった。昨今のいじめの特徴のひとつとして、遊びとの境界の曖昧さが指摘されるが（森田・清永，1994）[8]、本研究においても先行研究と整合する結果が得られ、遊び要素が混入するといじめに関する規範意識がゆらぎ、いつの間にかいじめが進行していく現状が窺われる。

2　中学生の「いじめ経験」

各いじめ行為の経験（加害経験・被害経験・傍観経験・経験まったくなし）の有無の人数を表１にまとめた。

表１　いじめ認識といじめ経験の関連

	いじめ判定率(%)	加害経験 有(人)	加害経験 χ^2値	被害経験 有(人)	被害経験 χ^2値	傍観経験 有(人)	傍観経験 χ^2値	全経験 無(人)	全経験 χ^2値
1. その子が触ったものを菌などと言う(例．〇〇菌と言ってはやし立てる)	82.9	93	.64	23	4.39	102	3.99 *	102	1.61
2. 持ち物をこわす	65.6	30	2.67	47	2.03	42	.50	187	.01
3. 相手がムカついたのでたたく	29.8	111	6.03 *	59	.76	67	.42	112	1.94
4. ネット掲示板に悪口を書き込む	95.7	2	12.10 ***	8	.32	17	.24	272	.01
5. 大勢で一人を取り囲んで文句を言う（ただし、暴力はふるわない）	91.0	26	1.79	16	1.55	51	.26	211	.12
6. 借りたモノやお金をわざと返さない	63.2	6	2.39	21	.38	9	1.44	264	4.43 *
7. 特定の子どもの持ち物を隠す	93.3	17	8.89 **	23	.23	52	.18	219	1.11
8. 特定の子どもの秘密をみんなにばらす	67.9	28	.14	36	7.99 **	52	.70	194	.89
9. 面倒な仕事を押しつける	46.5	67	18.00 ***	51	.47	54	.01	151	6.02 *
10. 特定の人の席に近づくのをみんなで避ける	92.3	41	1.61	11	.91	65	.18	193	.01
11. クラスの中の一人をみんなで無視する	95.7	25	.00	12	.53	44	1.04	224	.00
12. 口調や身体的特徴などについてからかう	72.2	66	.88	50	2.61	69	.32	138	1.30
13. 個室トイレの外からからかう	79.6	9	1.11	5	1.34	22	.89	263	2.70
14. 遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例，プロレスごっこ）	30.4	96	10.99 **	52	6.82 **	74	6.26 *	135	20.17 ***
15. 相手を傷つけるようなメールを直接送る	85.3	7	4.87 *	7	1.51	10	2.14	277	2.08

*＝p<.05，**＝p<.01，***＝p<.001

(1)　加害経験

加害経験有りの人数が多い項目は、順に「3．相手がムカついたのでたたく」(111 人)、「14．遊びと言ってちょっかいをだす、たたく (例．プロレスごっこなど)」(96 人)、「1．その子が触ったものを菌などと言う（例．〇〇菌と言ってはやしたてる)」(93 人）であった。これらは約 3 分の 1 の子どもに加害経験があるいじめ行為であり、「プロレスごっこ」や「〇〇菌とはやしたてる」等遊び的

要素が色濃く含まれる行為は中学生にとって非常に加害頻度の高いいじめ行為であることが明らかになった。

一方、加害経験が少なかったのが「4．ネット掲示板に悪口を書き込む」（2人）、「6．借りたモノやお金をわざと返さない」（6人）、「15．相手を傷つけるようなメールを直接送る」(7人) の3種の行為であった。「掲示板に悪口を書き込む」や「相手を傷つけるようなメールを直接送る」は、近年新たないじめスタイルとして深刻化が懸念されている「ネット上のいじめ」であるが、本研究の協力者であるＹ県内中学生の間では加害頻度が低いこと、また、お金やモノがからむ窃盗という非行との境界があいまいな行為の頻度も低いことが明らかになった。

(2)　被害経験

被害経験有りの人数が多かったのは、順に、「3．相手がむかついたのでたたく」（59人）、「14．遊びと言ってちょっかいをだす、たたく (例．プロレスごっこなど)」（52人）、「9．面倒な仕事を押しつける」（51人）であった。被害という立場からは、身体的暴力を受けた経験が多く報告されており、本人にとって「友だちからの暴力」が心に大きな影をおとす経験として残っていると考えられる。

加害経験有りの人数と比較してみると、加害経験ありの人数のほうが被害経験ありの人数より多かったのが、「1．その子が触ったものを菌などと言う（例．○○菌と言ってはやしたてる）」「3．相手がむかついたのでたたく」「5．大勢で一人を取り囲んで文句を言う（ただし、暴力はふるわない）」「9．面倒な仕事を押しつける」「10．特定の人に近づくのをみんなで避ける」「11．クラスの中の一人をみんなで無視する」「12．大勢で一人を取り囲んで文句を言う」「13．個室トイレの外からからかう」「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」の9項目であった。特に「1．その子が触ったものを菌などと言う」は加害経験者93人に対して被害経験者23人、「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」は加害経験者96人に対して被害経験者52人、「3．相手がムカついたのでたたく」は加害経験者111人に対して被害経験者59人という人数差が見られた。これは、ある程度限定された被害者に多数の子どもによるいじめ行為が集中していることを示していると考えられ、看過できない事態の深刻さが窺われる。

一方、被害経験有りの人数のほうが加害経験有りの人数よりも多いのが、「2．持ち物をこわす」「4．ネット掲示板に悪口を書き込む」「6．借りたモノやお金をわざと返さない」「7．特定の子どもの持ち物を隠す」「8．特定の子どもの秘密をみんなにばらす」の5項目であった。項目内容を見てみると、２つのモノにまつわるいじめ行為が含まれている。加害者側にとってはかならずしも攻撃的意図のない「うっかりミス」であり、すぐに忘れてしまうような出来事でも、被害を受けた側にとっては自分の所有を脅かされた経験として記憶に刻まれ、さらに繰り返されれば「わざと」やっていると解釈されることが、報告人数差となって表れているのではないだろうか。

(3)　傍観経験

森田・清永（1994）[8] が「いじめの四層構造」を提唱して以来、加害者・被害者に加えて傍観者・観衆もいじめの当事者と考えられることが一般的になった。本研究においては「自分は関与していないが周りで見ていただけ」の経験を傍観者経験としてその有無について尋ねた。

傍観者経験有りの人数が多かったのは、「1．その子が触ったものを菌などと言う（例．○○菌と言ってはやしたてる）」「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」「12．大勢で一人を取り囲んで文句を言う」の３項目であり、いずれも集団的な場において行われる行動で

あり、他者の目につきやすい顕在的ないじめ行為が挙げられている。また、多人数が特定の子どもを攻撃するという多対１の関係性のもとに行われる数の圧力を伴ういじめ行為であり、加害者が観衆の目を意識しながら行う行為でもある。中学生の世界では、遊びの影に隠れがちな集団的いじめが数多く発生しているものと考えられる。

(4)　経験なし

「自分が誰かにしたこと」も「誰かに自分がされたこと」も、「自分は関与していないが、周りで見ていただけ」という経験もない子どもたちを「経験なし」とした。人数はどの項目も全体の３分の１以上、多いものだと９割程度の子どもが「経験なし」としている項目もあることから、まったく経験もなく、おそらくは関心もない子どもが相当数存在していることが推測される。しかし、現実にはどのクラスにも何らかのいじめ行為が存在していることが想定され、「経験なし」と回答する子どもの中に、「とにかくいじめとは関わりたくない」という回避的心性があるのではないかとも考えられる。

3　いじめ認識といじめ経験の関連性

各いじめ行為の経験（加害経験・被害経験・傍観経験・経験まったくなし）の有無とその行為を「いじめ」とみなすかどうかの規範意識の関連性を検討するために、クロス集計表を作成し、χ^2 検定を行った（表１参照）。

(1)　加害経験といじめ認識

いじめ認識と有意な関連がみられた加害経験は、「3．相手がムカついたのでたたく」($\chi^2 = 6.03$, $p < .05$)、「4．ネット掲示板に悪口を書き込む」($\chi^2 = 12.10$, $p < .001$)、「7．特定の子どもの持ち物を隠す」($\chi^2 = 8.89$, $p < .01$)、「9．面倒な仕事を押しつける」($\chi^2 = 18.00$, $p < .001$)、「14．遊びと言ってちょっかいをだす、たたく (例．プロレスごっこなど)」($\chi^2 = 11.00$, $p < .01$)、「15．相手を傷つけるようなメールを直接送る」($\chi^2 = 4.87$, $p < .05$) の６つのいじめ行為であった。

有意な関連がみられた６項目いずれも加害経験を有する子のほうが、無い子よりも「いじめではない」と判定する割合が高くなっている。ここから、いじめ加害者は、いじめかどうかの判断が甘く、「いじめではない」との判断のもと、いじめ行為に及んでいる可能性が示唆される。

(2)　被害経験といじめ認識

被害経験の有無と「いじめ認識」との関連があったのは、「8．特定の子どもの秘密をみんなにばらす」「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」の２つの行為のみであった。このうち「秘密をばらす」に関しては、被害経験を有する子のほうが無い子よりも当該行為を「いじめだと思う」割合が有意に高くなっている。被害経験をもつ子どもが、その痛みがわかるが故に当該行為を「いじめ」と判断する割合が被害経験のない子どもよりも高くなることは容易に納得がいくことであり、本研究の結果もそうした一般的な知見と整合している。しかし、「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」については、予想に反して、被害経験のある子どものほうが当該行為を「いじめではない」と回答する率が有意に高いという結果であった。実数

をみても被害経験を有する子ども52名のうち、当該行為を「いじめだと思う」としたものは8名のみであり、残り44名は「いじめではない」と回答している。森田・清永（1994）[8] は、現代型いじめの特徴であるいじめの潜在化の原因として、深刻ないじめ被害を受けた子どもたち自身が「たいしたことはない」「あれはいじめではない」という判断をくだすことが多いことを指摘し、そうした子どもの判断を鵜呑みにすることに警鐘を鳴らしているが、本研究においても同様の結果となった。遊び型いじめは、中学生のいじめを考える上で特に重要な位置づけをもつものと言えるだろう。

また、統計的には被害経験の有無とは有意な関連はないが、被害経験のある中学生全員が「いじめ」と認識した項目が4項目あった。「5．大勢で一人を取り囲んで文句を言う（ただし、暴力はふるわない）」「10．特定の人の席に近づくのをみんなで避ける」「11．クラスの中の一人をみんなで無視する」「15．相手を傷つけるようなメールを直接送る」の4つのいじめ行為である。このうち、「みんなで避ける」「無視する」は、「秘密をばらす」と併せて子どもの社会的関係性に関する攻撃であり、社会関係の意図的な操作性こそ含まれないが、Crick & Grotpeter(1995) [1] の提唱する「関係性攻撃」に該当する。中学生という発達段階は、類似性が強調される友人関係を特徴とし、それゆえ友人のまなざしが気になる時期である。そうした時期に友人から避けられたり、無視されるということは、中学生にとって耐え難い出来事であり、経験した子どもたちはその辛さを実感していると思われる。身体的暴力に比べると顕在化しにくいスタイルのいじめであるが、心への打撃の大きさを思えば、決してあってはならないいじめ行為と言えるだろう。

(3)　傍観経験といじめ認識

傍観経験の有無と「いじめ認識」との関連があったのは、「1．その子が触ったものを菌などと言う（例．○○菌と言ってはやしたてる）」「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」の2つの行為のみであった。

「1．その子が触ったものを菌などと言う」といういじめ行為については、傍観経験を有する子のほうが無い子よりも「いじめだと思う」割合が有意に高かった。これは、「見ていただけ」の子どもたちがこうした行為を決して肯定しているわけではなく、むしろ否定的な行為と思いつつ「見て見ぬふり」の傍観者として存在していることを示唆している。しかし、「14．遊びと言ってちょっかいをだす、たたく (例．プロレスごっこなど)」については、傍観経験を有する子のほうが、むしろ無い子よりも「いじめではない」と判定する割合が有意に高くなっている。社会的に否定的含意をもつ「いじめ」行為だと思わないから「見ているだけ」でいられるのかもしれない。先の「○○菌」いじめとは異なり、遊び型いじめについては「見ていただけ」の中に観衆として面白がっている子どもの姿が浮かび上がる結果となった。

(4)　まったく経験がない子のいじめ認識

何らかのいじめ経験の有無と「いじめ認識」との関連があったのは、「6．借りたモノやお金をわざと返さない」「9．面倒な仕事を押しつける」「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」の3つの行為であった。

「6．借りたモノやお金をわざと返さない」については、一切経験なしの中学生は、圧倒的な率で「いじめである」と認識するが、何らかの経験を有する子どもだと「いじめ」と認識する子どもと「いじめではない」と認識する子どもがほぼ同数となる。「9．面倒な仕事を押しつける」と「14．遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例．プロレスごっこ）」については、経験なしの子どものほうが

有意に高い率で「いじめである」と認識されており、何らかの経験があると「いじめではない」の方が多数派となっている。経験が無いほうが行為の意味をより理念的に善悪で判断するため、「いじめである」との認識率が高くなるものと思われる。

4　「いじめ認識」の学年差・性差の検討

いじめ認識の学年差と性差を検討した結果を表２にまとめた。表中の比率（％）は「いじめだと思う」との回答率を示すものとする。

(1)　学年差の検討

学年差に関しては、「７．特定の子どもの持ち物を隠す」「10. 特定の人の席に近づくのをみんなで避ける」「11．クラスの中の一人をみんなで無視する」の３項目に関しては、学年が１つ上がることによって「いじめだと思う」の回答率が有意に高くなっている。しかし、「３．相手がムカついたのでたたく」「４．ネット掲示板に悪口を書き込む」「12．口調や身体的特徴などについてからかう」の３項目については、逆に１年生から２年生に上がるにつれて、「いじめだと思う」割合が減少しており、いじめ行為の容認が進んでいる結果となっている。いじめ認識がより規範的な方向性へ進んでいる３項目は、所有の権利を脅かす、あるいは社会的排斥に関する項目であり、青年期に道徳性がより社会的な高次のレベルへと発達していくプロセスと整合的な結果となっている。一方、いじめ行為の容認が進行している項目の内容には、加害者の苛立ちや遊び半分の攻撃性の発露が見られ、中学生活において蓄積したストレスをいじめという形で発散しているようにも思われる。中１から中２へと進級していくプロセスにおける子どもの適応支援の大切さをみてとることができる。

(2)　性差の検討

性差が認められたのは、「1．その子が触ったものを菌などと言う（例．○○菌と言ってはやしたてる）」「3．相手がムカついたのでたたく」「7．特定の子どもの持ち物を隠す」「11．クラスの中の一人をみんなで無視する」「13．個室トイレの外からからかう」の５つの項目であった。そのうち、「個室トイレ」のみが女子の「いじめだと思う」の回答率が男子よりも高く、その他の４項目は男子のほうが高いいじめ認識を有していることが明らかになった。一般に、男子のいじめには身体的暴力が顕著にみられ、女子に特徴的なものとしては関係性攻撃が指摘されるが（坂井・山崎，2003）[9]、本研究の結果からは必ずしもそうした性差はみられず、むしろ女子のいじめ行為容認の高さが確認された。

表 2　いじめ認識の学年差と性差の検討

	学年差			性差		
	1 年 (%)	2 年 (%)	χ^2値	男 (%)	女 (%)	χ^2値
1. その子が触ったものを菌などと言う（例．〇〇菌と言ってはやし立てる）	89.1	81.6	1.99	89.3	77.2	7.79**
2. 持ち物をこわす	74.6	64.5	2.27	70.9	62.3	2.46
3. 相手がムカついたのでたたく	40.6	27.2	4.33*	34.5	25.7	2.72†
4. ネット掲示板に悪口を書き込む	100	95.3	3.07†	95.9	96.6	.10
5. 大勢で一人を取り囲んで文句を言う（ただし、暴力はふるわない）	87.5	92.7	1.76	93.3	89.9	1.13
6. 借りたモノやお金をわざと返さない	64.1	63.2	.14	61.7	65.1	.36
7. 特定の子どもの持ち物を隠す	87.5	95.3	5.12*	90.6	96.6	4.55*
8. 特定の子どもの秘密をみんなにばらす	68.3	68.4	.00	67.1	69.6	.21
9. 面倒な仕事を押しつける	42.2	47.9	.65	43.0	50.3	1.63
10. 特定の人の席に近づくのをみんなで避ける	85.9	94.4	5.32*	91.9	93.3	.20
11. クラスの中の一人をみんなで無視する	92.2	97.0	3.02†	94.0	98.0	3.13†
12. 口調や身体的特徴などについてからかう	84.4	69.5	5.58*	70.9	74.5	.47
13. 個室トイレの外からからかう	76.2	81.5	.90	75.0	85.8	5.49*
14. 遊びと言ってちょっかいを出す、たたく（例，プロレスごっこ）	26.6	31.6	.61	32.9	28.2	.76
15. 相手を傷つけるようなメールを直接送る	89.1	85.0	.69	85.2	86.5	.10

†＝p<.10，*＝p<.05，**＝p<.01，***＝p<.001

IV　まとめと今後の課題

本研究においては、中学生がどのような行為を「いじめ」と認識しているのかを確認し、「いじめ経験」との関連について検討した。結果として、執拗さが希薄な衝動的暴力や遊び型のいじめ行為に対しては、「いじめ」とみなされない傾向があることが明らかになった。さらに、遊び的要素が色濃く含まれるいじめ行為は加害・被害共に経験者人数が多く、中学生にとって日常的ないじめのスタイ

ルであると思われた。

いじめ経験といじめ認識の関連としては、加害経験を有する子のほうがいじめ認識が甘く、自分の行為の規範的位置づけを明確に把握していないことが、いじめ行為の根底にあることが示唆された。被害経験については、遊び型いじめについては被害経験者でさえ「いじめではない」と考える傾向があること、また心の傷となるような潜在化しがちないじめが中学生にとって打撃が大きい可能性があることが示された。

いじめが子どもたちの心を蝕み、人間関係をゆがめてしまう現象であることは疑う余地もなく、防止策が求められる。しかし、その際、「いじめ」という認識を共有しているとの前提のもとで「いじめはよくない」「いじめ根絶」という道徳意識の向上をめざしたアプローチが多いのではないだろうか。本研究の結果から、そもそもどのような行為が「いじめ」なのかという認識のずれの存在が明らかになり、より根本的な認識に対してアプローチする必要性が示された。今後は、中学生の「いじめ認識」の変容をめざしたいじめ防止プログラム開発が望まれる。

参考文献

[1] Crick, N.R., & Grotpeter, J.K., Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. Child Development, 67, 993-1002, 1995

[2] 本間友巳, 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応．教育心理学研究，51，390－ 400, 2003

[3] 本間友巳, いじめ臨床．ナカニシヤ出版, 2008

[4] 池島徳大・倉持祐二・生田周二・橋本宗和・小柳和喜雄・吉村ふくよ・松岡敬興, いじめなどの問題に対する学級経営改善のための対立解消プログラムの開発- カナダにおけるピア・サポート活動を手がかりとして―．教科教育学研究，24 集，315－ 341, 2006

[5] 松尾直博, 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向：学校・学級単位での取り組み). 教育心理学研究，50(4)，487-499, 2002

[6] 文部科学省, 生徒指導上の諸問題の現状について (概要)，2004

[7] 文部科学省, 平成 19 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」, 2008

[8] 森田洋司・清永賢二, 新訂版　いじめ―教室の病い．金子書房, 1994

[9] 坂井明子・山崎勝, 小学生における攻撃性得点の分類基準―小学生用 P-R 攻撃性質問紙による 3 種類の攻撃性について． 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要， 48，101-106, 2003

[10] Sharp, S. & Smith, P.K. (eds), Tackling bullying in your school: A practical handbook for teachers.　（奥田眞丈他訳　1996　あなたの学校のいじめ解決に向けて．東洋館出版社）, 1994